

第4次瀬戸市総合計画

「芸術性豊かな創造・交流都市」

～豊かな自然とともに～

平成6年

瀬戸市

序 総合計画の意義と役割

1. 総合計画とは

市町村の行政の目的は、地域に根ざした市民のための施策を行うことにあり、望ましいまちづくりを実現することである。

まちづくりという言葉には、道路や下水道の整備など物的なことから、コミュニティ活動や地域福祉など社会のしくみに至るまで、いろいろな場面において様々な意味で用いられるが、総合計画においては、まちづくりの全体像を示すことが必要である。

そのためには、様々な部門で行うまちづくりを体系的に組み立て、行政の役割や仕事の目的が、市民にも常に理解できるようにしておくことが必要になる。

このような総合計画の意義を踏まえ、本計画は、今後目指す方向を定めるとともに、これに向かって行政の仕事を計画的に進めるための総合的な指針とする。

2. 総合計画のねらい

第3次総合計画では、名古屋大都市圏の拡大に伴うまちの変化に対応しつつ、多様な産業を定着させ、まちに活力を与えることが主なテーマの時代であった。

第4次総合計画の主要なテーマとなるものは、一言で言えば、「21世紀の地域ビジョン」を構築することである。

従ってこの計画では、近年の社会情勢の大きな変化を踏まえた上で、21世紀を展望し、新しい社会をリードするよう取り組む必要がある。

本市を取り巻く状況を見れば、リニア中央新幹線、第2東名・名神高速道路、中部新国際空港などの国土的な高速交通体系の再編整備構想を背景に、名古屋大都市圏では圏域内交通網整備の一環としての東海環状自動車道、名古屋瀬戸道路、新交通システム東部丘陵線などの交通網整備が計画されている。

さらに、市の南・東部の、21世紀万博候補地周辺地区においては、あいち学術研究開発ゾーンの拠点を整備する構想がある。

これらは、本市にかつてない構造的変化をもたらすものであると同時に新たな社会的活性化の要因となり得る可能性を秘めているものである。

これらを踏まえれば、本計画は本市の都市構造を抜本的に再編する計画とも言える。

一方、社会の基調を見れば、東京一極集中やバブル経済などに代表される偏った成長が是正され、安定成長下の生活を見直すことや、地球規模での環境保護、人的交流などが重視される時代が到来している。

こうした基調は、20世紀が終わり、大きな時代の転換が世界的に起こりつつあることの表れである。

その変動の行く末は予断を許さないものであるが、少なくとも21世紀は、地球環境の危機に対応しなければならない社会であることは確実である。20世紀の主流であった開発成長型の価値観は大きく見直される時代となる。

このことは、地域のビジョンを国土開発や上位の計画だけに基礎を置いて考えていくのではなく、市町村の地域計画を国などに認知させ、上位計画に盛り込まれるようにするなど、自らの足元を踏まえた主体的な地域政策を実施することが重要なことを意味する。

第4次総合計画は、これらの時代認識を踏まえ、自然環境や歴史的な蓄積のある地域社会を有効に活用する主体的なまちづくりに取り組むためのものである。

3. 構成と目標年次

第4次総合計画は、基本構想、基本計画、及び実施計画によって構成される。

「基本構想」は、1994年（平成6年）を初年度とし、2010年（平成22年）を展望した長期計画であり、外部環境の大きな変化に主体的に対応しつつ、これから本市の進むべき方向を示す。

「基本計画」は、基本構想に掲げた将来像を達成するためのプロジェクトや施策を示したものであり、目標年次は2005年（平成17年）とする。また、基本計画においては、地域ごとの将来像を示す地域別計画も策定する。

「実施計画」は、基本計画において策定された施策を現実の行財政事情の中で、どのように実施していくかを明らかにするもので、予算編成の指針とするものである。

第1章 瀬戸市の将来像

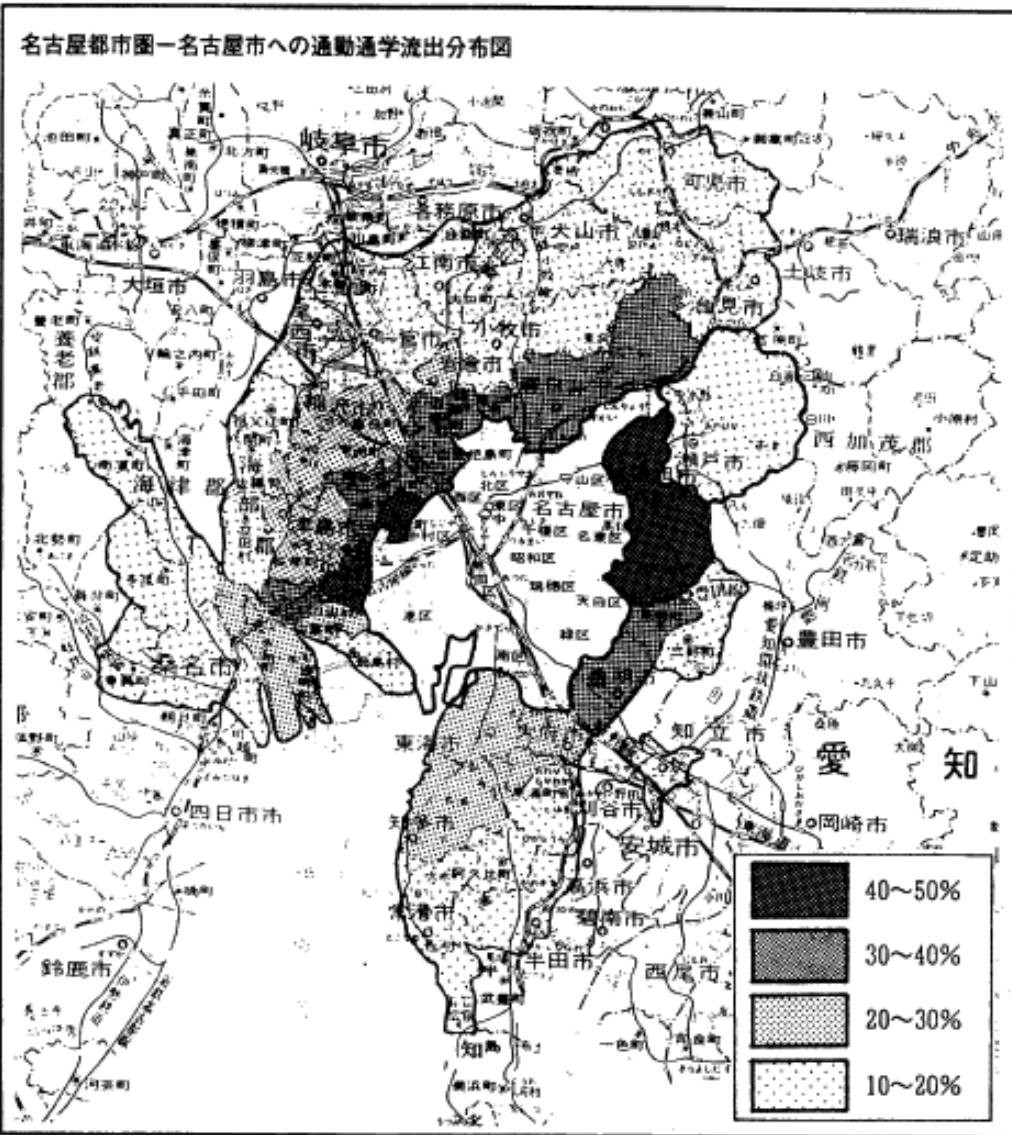
1-1 瀬戸市の特色

(1) 位置的特性

本市は、北側で美濃、東側で三河に接し、尾張の北東部に位置する、行政区域11.52km²、人口約12.8万人（平成5年）の都市である。

名古屋市の中心部からは約20km圏にあり、名鉄瀬戸線が約30分で直結している。

また、尾張丘陵の入口にあり、名古屋大都市圏の“縁”を形成する都市の一つとして、これらの都市をつなぐ東海環状都市帯の一翼を担う役割も期待されている。



(2) 自然的特性

本市の地形は「平地、丘陵地、山地」の3つに大別される。特に、市域全体の約60%を森林が占めており、緑豊かなことが一つの特徴となっている。

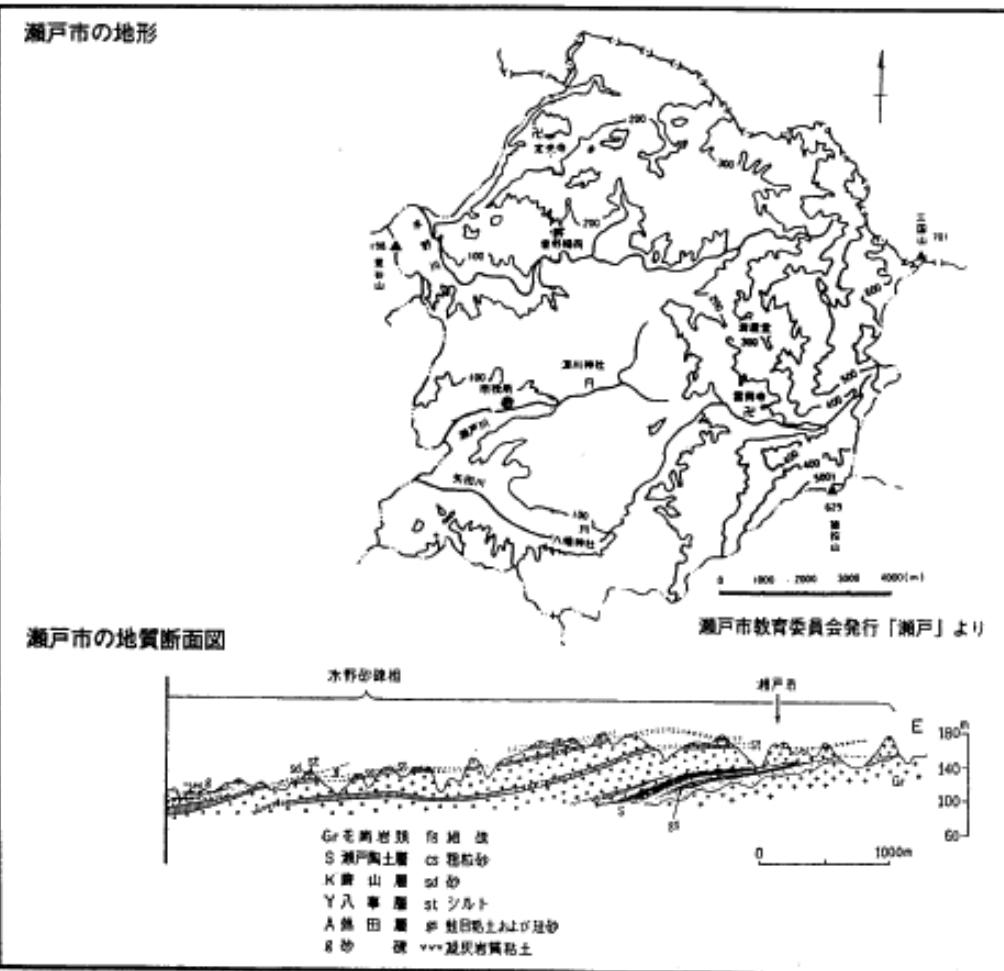
これらの森林は、一部の原生林を除き二次林の常緑針葉樹林が占めており、所有形態で見ると国県有地の割合が高い。

標高100mから200mにかけての丘陵地に、半数以上の人々が居住している。丘陵地には、治山事業でクロマツが植林されるなど、新たに縁を作り出してきた部分も見受けられる。

また、丘陵地からおおむね西に向かって流れる水野川、瀬戸川、矢田川の3つの水系が、標高100m以下の沖積平野を作っており、現在では新しい住宅地にもなっている。

市の中央部の大部分を占める丘陵地の地層は、新第三紀鮮新世の地層で、木節粘土、蛙目粘土、けい砂を大量に含んでおり、これが良質な窯業原料となっている。

これらの良好な地質条件と丘陵地に抱かれた定住環境が、やきものの千年余の歴史を刻むまちの成立の基礎的な要因となっている。



(3) 歴史的特性

戦国時代までー「やきもののさと」成立期

- ・瀬戸の窯業は平安時代に始まり、そのころは中央の貴族や寺院へ販売されていたと言われている。
- ・鎌倉時代には、加藤四郎左衛門景正が中国（宋）のやきものの優れた技術を身につけて日本に帰り1242年（仁治3年）に瀬戸の地でやきものづくりを始めたと言われている。
- ・また、日用雑器・茶器・仏具などの中世陶器は、人々の購買力の増加に伴って生産を増やし、瀬戸の窯業の発展を促した。

江戸時代前期ー「やきもののさと」成長期

- ・江戸時代の瀬戸窯は、1610年（慶長15年）に初代尾張藩主徳川義直が美濃に離散していた瀬戸の陶工を召還し、御用窯として保護を加えたことがその始まりだと言われている。
- ・また、前代と異なり村々で特色のあるものを分業的に生産するしくみができたのもこのころの特徴である。

江戸時代後期ー「やきもののさと」転換期

- ・江戸時代後期には、九州肥前の磁器生産に対抗するため、瀬戸窯においてもようやく染付磁器焼成への機運が高まってきた。
- 1807年（文化4年）に加藤民吉が、九州から磁器製法を修行し帰村すると、磁器生産は陶器生産をしのぐ勢いとなった。
- ・また、交通網の発達により瀬戸のやきものは日本中に行き渡り、やきものることを一般に「せとも」と呼ぶようになったのもこのころである。

明治以降ー近代的窯業生産地への再編期

- ・明治政府が打ち出した「殖産興業政策」は、窯株制度などの封建的な諸制度からの解放を意味した。そして、1873年（明治6年）に日本政府が正式參加した「ウィーン万国博覧会」に、せとものが展出されたのを契機として、洋食器を始めとする輸出に拍車がかかり、瀬戸の窯業を画期的に飛躍させることとなった。

都市形成上の特徴

※窯業生産の開始にともない、工人達は燃料や水、粘土などを求めて移り住んだと言われている。

都市形成上の特徴

※このころから、瀬戸村、赤津村、上水野村、下半田川村、下品野村など現在の集落とほぼ同じ場所に窯業生産の拠点が移ってきた。

◇水野代官所の勢力図

—江戸時代の後期、水野村に代官所が置かれた—



瀬戸市教育委員会発行「瀬戸」より

◇江戸時代の登り窯



瀬戸市教育委員会発行「瀬戸」より

都市形成上の特徴

※深川神社の西側は茶屋町と呼ばれ、芝居小屋や料理屋などが軒を連ねた。これが現在の朝日町、池田通りの始まりである。瀬戸川の対岸には、末広町商店街が形成され、東隣の花柳街は三味線の音と男女のざわめきでたいそうにぎやかであった。

第一次世界大戦以降—都市化の進展期

- ・1914年（大正3年）に勃発した第一次世界大戦で、歐州の陶磁器製品の製造がストップしたことにより瀬戸窯業界はノベルティを中心に活況を呈した。
- ・しかし、1931年（昭和6年）に起きた満州事変は、日本製品のボイコット運動を招く一方、軍事産業優先施策の展開により瀬戸窯業界に危機をもたらした。しかし、こうした厳しい状況にもかかわらず、鍋・釜などの代用品や防衛食器、陶貨など独自のアイディアと工夫により、戦時中をしのいだ。



第二次世界大戦以降—戦後復興期

- ・第二次世界大戦後の本市は、戦災を受けることが少なかったことや、戦後の物資不足に伴い、生活用品の需要が高かったことにより、復興の道を確実に歩んできた。
- ・1947年（昭和22年）には瀬戸の工場は500以上にも達し、この数字は他の窯業地と比較すると驚くべきものであった。その勢いは、その後もとどまることを知らず、昭和30年代後半には、瀬戸窯業界はそのピークを迎えた。

◇昭和22年の瀬戸



1970年以降—オイルショック後

- ・戦後躍進を遂げてきた瀬戸窯業界であったが、輸出依存度が大きかったため、オイル・ショックや変動相場制への移行の影響を大きく受けた。中でも円高による不況は、深刻な状況を瀬戸窯業界にもたらすこととなった。
- ・家族労働を中心とした地場産業都市であったため市街地には工場と住宅が混在、複雑な細街路が残される一方、周辺部の丘陵地に新しいまちが形成されてきた。
- ・窯業の歴史が本市の歴史を形成してきたが、名古屋圏の拡大に伴い、これまでとは異なった要素が都市の歴史形成に付加されるようになった。
- ・最近では、東海環状自動車道の整備計画やあいち学術研究開発ゾーン構想など、外部環境の変化が予想される中、市としても「瀬戸・いきいきビジョン21構想」を発表し、名古屋圏での独自性を主体的に發揮していくための構想を打ち出している。

都市形成上の特徴

※名古屋圏の拡大の影響が出始め、衛星都市としての役割が徐々に期待されるようになった。農地の宅地への転用が進み、丘陵地に斐野団地や水野団地などの大規模住宅用地の整備が進んだ。

※人口の増大に伴い、学校、図書館、文化センター、公民館などの文化教育施設が充実された。

◇平成1年の瀬戸



(4) 文化的特性

◎開放的で独自性豊かな風土

瀬戸窯業界は極端に分業化され、子供から老人まで様々な仕事が用意されるなど、職人のまちを形成し、職人のまちとしての生活文化が育まれてきた。また、特有の言葉である「瀬戸弁」を有し、宵越しの金を持つことをよしとせず「尾張の小江戸」と言われるなど、きっぷの良さや独自性の高い気質を持っていたことがうかがえる。

一方、人口の多くを占める職人やその家族にとっては、家賃も安く、日用品が「通い帳」で購入できるなど、大変暮らしやすい街であった。さらに「瀬戸へ行けばなんとかなる」と言わされたことからも分かるように、他郷からの人も数多く受け入れるなど、開放的な土壤が活況を呈する要因であった。

◎積極的な文化交流

市内には藤四郎作といわれる「狛犬」や、「定光寺本堂」など、国指定の文化財を始めとする数多くの文化財がある。また、陶都と呼ばれ千年余のやきものの歴史を有し、その歴史を物語る数多くの窯跡も残されている。

また、窯業を中心とした文化は、中国大陸や近代以降の欧米など世界各地と積極的な交流を行ってきた。これらの交流や戦略的な情報収集など、先駆的で実験的・好奇心旺盛な気風は、情報を瀬戸流に加工し製品や文化として発信するなど、他産地に比べ常に優位性を保ってきた。

歴史、気風等からの展開の視点

○窯業界は歴史的に見ても、幾多の危機を独創性と先進性で乗り越えてきた。
そして、新たなる展開の方向が次の時代を特徴づけており、急速な経済環境の変化の中で、今後の窯業界をどう位置づけるかがポイントとなる。
その方向として、手づくり化の強調など高付加価値化を目指した「工芸化」の流れがあると思われる。
一方、まち自体のイメージを上げるためにも、「工芸化」「芸術化」へ移行すべきであると思われる。

○本市の発展を支えてきた「よい部分」を再評価し、現代に適合させることが求められている。
例えば、外部から新鮮な情報を積極的にキャッチし、瀬戸流に加工し瀬戸の製品、文化として発信していくことや、外からの人、物、文化を積極的に受け入れるなど、様々な分野で外部との交流を推進することが、次なる瀬戸の展開の鍵になると思われる。

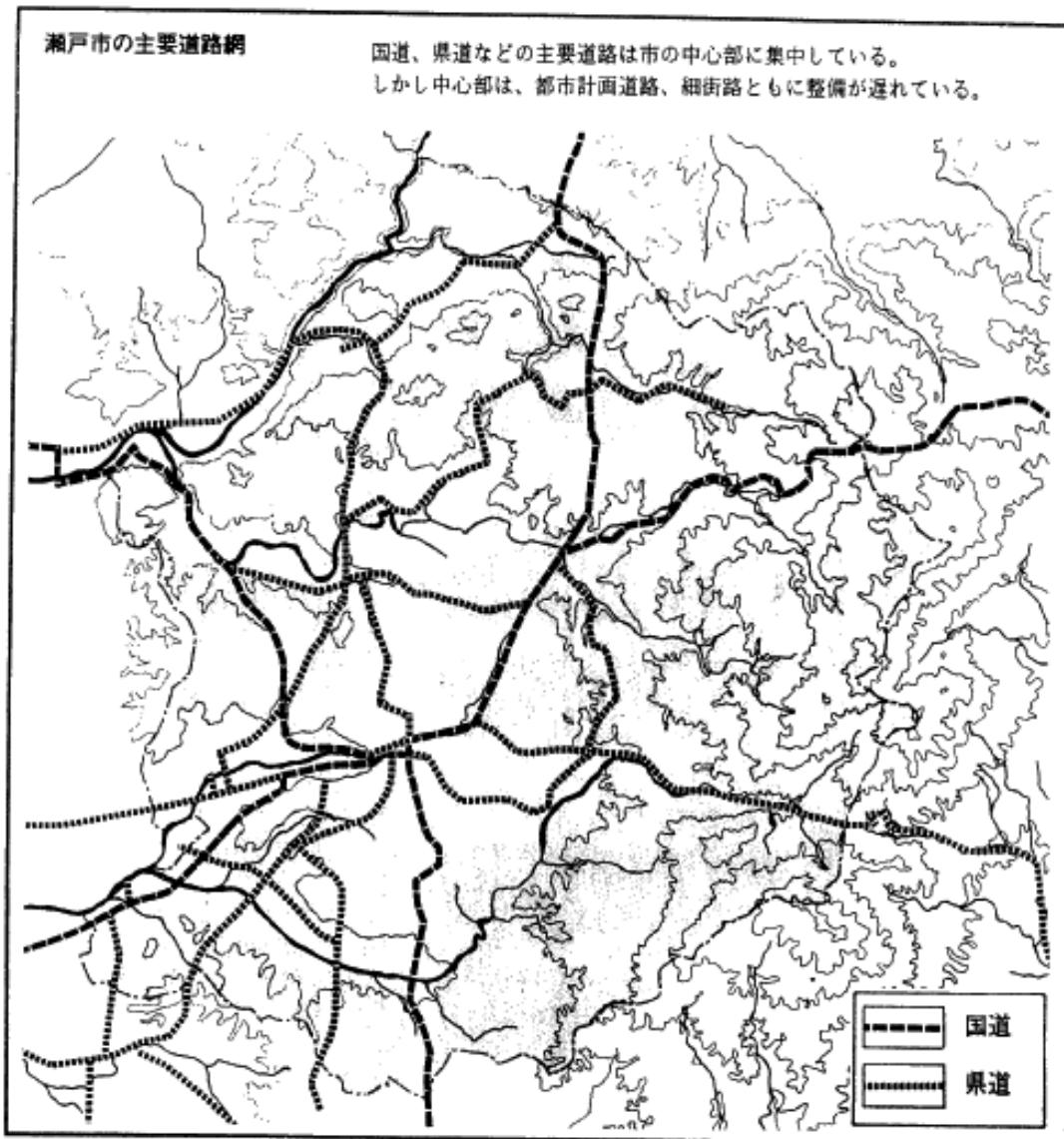
1-2 主な課題と課題克服の視点

(1) 主な課題

1) 都市基盤整備の立ち遅れ

現状は、通過交通を始め主要な交通が中心市街地に集中しており、その結果、慢性的な交通渋滞を各地で引き起こしている。また、公共下水道なども十分な整備がされていない。

さらに、脱車社会を支える公共交通機関の整備も十分とは言い難く、これらの基本的な都市基盤整備の遅れが課題となっている。



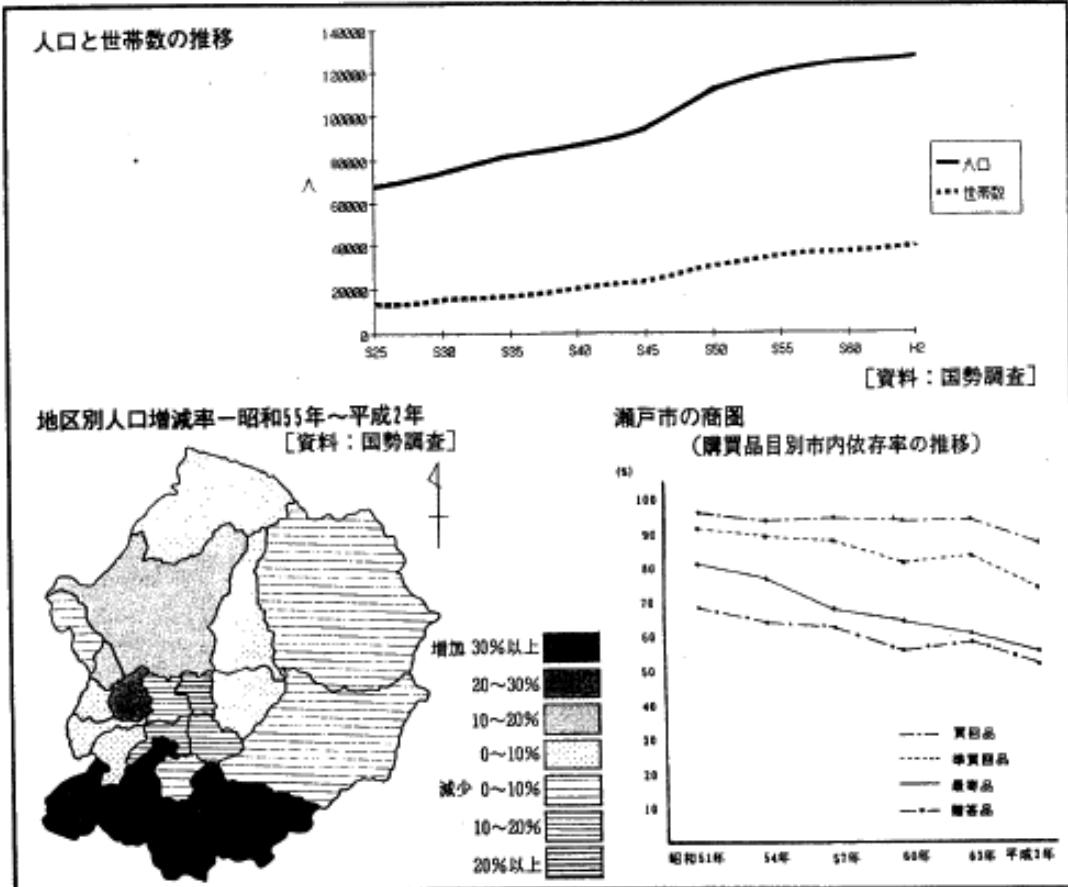
2) 市街地の活力の低下

中心市街地においては、若年人口の流出や商圏の縮小など、中心部としての活力が低下してきている。

従来、市西部地域を中心に名古屋大都市圏の外延的拡大の影響を受け、ベッドタウン化が進行してきたが、最近では、職住近接の生活様式を基礎に地場産業地域を形成してきた中心市街地にも、工場跡地などを利用したマンション立地が進み、名古屋大都市圏の圧力が浸透し始めている。

また、このことは、商圈にも多大な影響を及ぼし、かつて広域商圈を擁し、買い物回り品を中心とした品揃えをしていた商店街も、現在では最寄り品中心の近隣商店街となっている。

従って、現在では広域的な吸引力に乏しく、かつてのにぎわいを喪失し、活力が低下し、魅力に乏しくなっている。

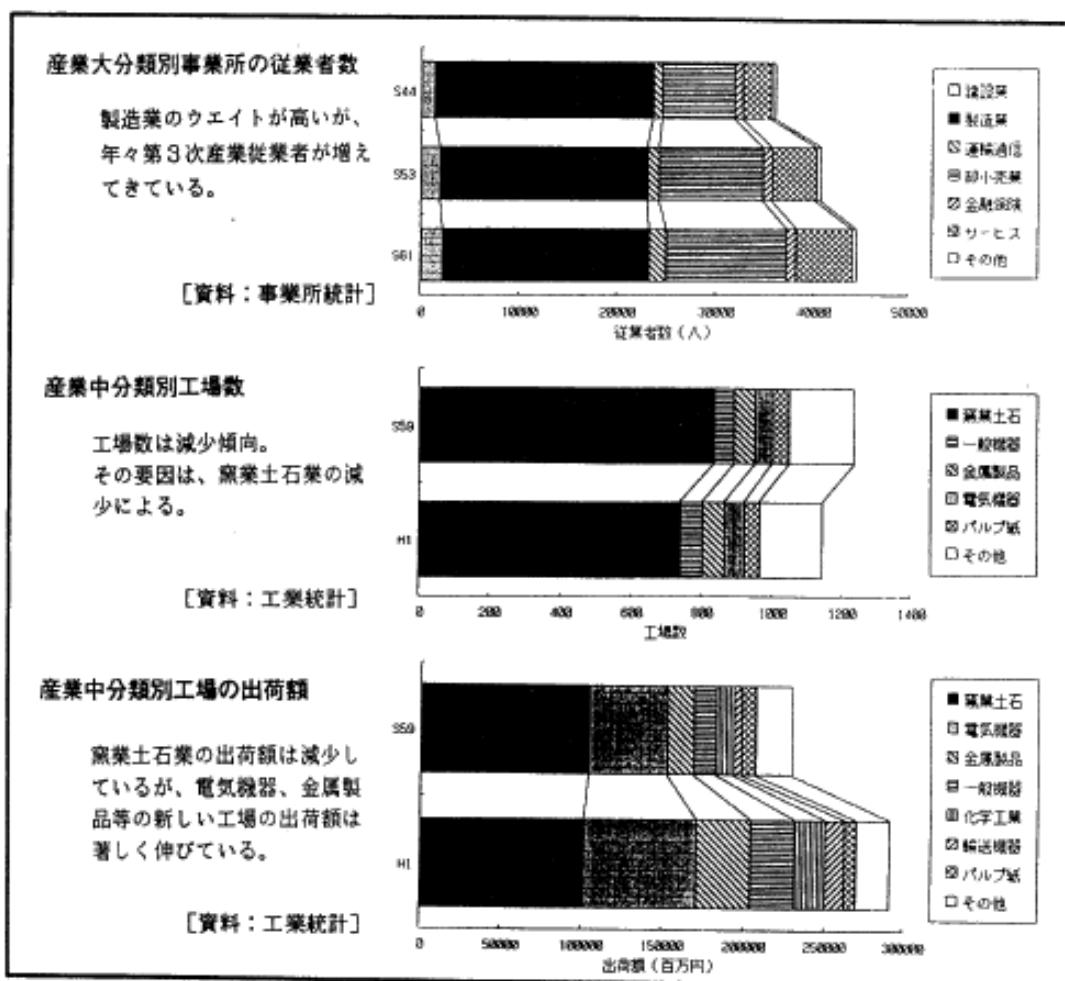


3) 地場産業の低迷

本市を代表する産業である陶磁器産業は、製造品出荷額等に占める割合を相対的に下げてきている。しかし、市を特徴づける産業として、今後も陶磁器産業に対する期待は高い。

しかし、他の窯業地が経済の近代化に対応すべく機械化による大量生産を行う中で、本市の陶磁器産業は相対的にその地位を弱めていった。また、これまで良質な原材料を生かし、良質なものを安価に提供することでその地位を築いてきたが、情報力、デザイン力、技術力は相対的な優位性を保てなくなっており、また、資源についても先行き不透明な今、未来への展望が開けているとは言い難い。

このような状況下にあって、地場産業の新展開を図り、市の顔として再生を図ることが課題となっている。



4) 濑戸らしさの演出不足

人、もの、情報などの国際的なつながりは、複雑化、多様化しながら拡大しており、ひとつの都市といえども国際的に孤立して生きていける時代ではなくなってきている。

このような国際化時代には、市としての確固とした独自性を確立することが、より一層求められている。

幸い本市には、世界的にも名の知れた「やきもの」という素材があり、これをいかに産業、技術、芸術、文化、観光など多様な側面で生かし、広がりを持たせていくかが大切である。

さらに、やきもののまちとしての独自性をまちづくりに表現し、瀬戸らしさを演出していくことも重要である。

5) 環境に配慮した政策を

今後、大規模なプロジェクトを控えるなど様々な開発が予定されているが、その一方で市の特性である豊かな自然を保全することも重要なことである。

従って、開発に際しては、自然環境に配慮しバランスのとれたまちづくりを行うことが重要である。

(2) 課題克服の視点

1) 交通の混乱や土地利用の混乱を克服するために

これまで、名古屋市との関係が強かったため、東西方向の軸を機軸として考えてきた。将来的には、「瀬戸川文化プロムナード計画」を核としたシンボル軸を中心として、「世界陶芸の森構想」「瀬戸リサーチパーク構想」など様々な開発プロジェクトや、「水野特定土地区画整理事業」などの住宅系の開発により、新市街地が円状に配列される形になる。このような都市の構造に着目し、中心部への車の流入を一定量排除し、環状の道路網の整備を都市の骨格とすべきである。

また、「東海環状自動車道」や「名古屋瀬戸道路」さらには「第3環状線」などを広域的な機軸としていく必要がある。

さらに長期的な視点としては、都市空間が一層拡大しても、瀬戸の特色である豊かな森林資源を生かし、魅力ある環境をつくっていくことが重要である。

また、この恵まれた森林資源を保全するとともに、「定光寺フォレスト構想」など、森林の魅力を持った拠点づくりをすることも考え方一つ、新市街地でも、積極的に緑を創出し、中心部の都市的空間から周辺部の自然的空間まで段階的な緑のネットワークを形成すべきである。

2) 新旧のまちでの停滞や混乱を克服するために

中心市街地では、人口の減少や若者の流出、商圈の縮小、市街地環境の悪化など様々な問題が起きている。一方、周辺部ではミニ開発など新しい住宅地でのスプロール化が進んでいる。

このような新旧のまちでの問題は、大都市名古屋の市街化圧力が東へ波及し、周辺部を住宅地へと変化させてきたことと深く関係している。

これは、古い歴史を持つやきもののまちであった本市が、住宅都市の色合いを強めていった過程でもあり、この流れに逆らうことなく、しかも本市の独自性を失わないようにすることが必要である。

すなわち、旧来の職住近接の住まい方も名古屋圏の住宅地としての性格も否定することなく、様々な住まい方を許容できるまちづくりを基本に考えるべきである。

特に、中心市街地においては、都心に住む魅力として、職、住、にぎわい、潤いなど複合的な魅力のある場とすることが、また、周辺部の新市街地では、計画的な基盤整備に加え地域のコミュニティを育み、快適な生活環境を確保することが求められる。

このように様々な住まい方を許容し、暮らしやすく、かつ安心できるまちとするためには、中心市街地においては集客の核となるようにぎわいづくりが必要となり、周辺部においては、地域固有の歴史、文化などに立脚したコミュニティ形成を図ることが必要である。

3) 陶磁器産業の低迷を克服し、まちの活力を振興するために

これまで、工業団地開発などによって、新しい産業の定着による活力づくりを進めてきたが、「やきもの」という市の特性を踏まえた活力づくりは、歴史や文化、市の独自性などとも絡む、基本的な問題でもある。

そこで、次のような視点から目標を考える。

まず、本市を取り巻く広域的な条件が大きく変化することに着目し、活発な交流を促進することを、産業の活性化に結びつけていく。

これまでの本市の広域的な関係は、名古屋市と深く関係してきた。しかし、今後は、南・東部地区の開発や、中部新国際空港、さらにこれと直結する東海環状自動車道などにより、本市を舞台として国際的な交流が活発に行われると思われる。

このような人、もの、情報の活発な交流をうまく生かすことが、高付加価値化を指向する陶磁器産業の飛躍にとって必要である。

次に、陶磁器産業が生産の面だけではなく、産業、技術、芸術、文化、観光などの多様な価値を持っていることに着目することである。このような多面的な角度で陶磁器産業の新展開を検討していくことも重要である。

さらに、陶磁器産業が、今後とも継続して発展するためには、生産環境の改善という基礎的な努力に加え、業界自体はもちろんのこと、まちのイメージづくりも積極的に行う必要がある。そのためには、まちの景観やまちなみデザインなど、芸術・文化、観光的側面を重視したまちづくりを行うことが求められている。

4) 歴史を継承し、瀬戸らしい魅力あるまちをつくるために

魅力あるまちづくりのための重要な視点は、「やきもののまち」「芸術・文化のまち」としてのイメージをどう表現していくかである。

そのためには、まず、「瀬戸川文化プロムナード計画」「世界陶芸の森構想」「定光寺フォレスト構想」など各種プロジェクトの中で、歴史、文化、自然などを生かしつつ、新しい芸術・文化を創造するための舞台として整備することである。

そして、そこでは、芸術・文化イベントの開催や生活文化の提案、既存の祭りの再評価、新たなる芸術・文化の創造、発信など躍動的な活動が常に行われていることが必要である。

これまでの歴史・伝統の上に新しい要素を加えて、次なる時代の「瀬戸らしさ」を創造し、表現すること、さらに、こうした活動を世界的な交流の輪として、国際的な独自性を発揮することが重要である。

1 - 3 社会動向と将来像

(1) これからの社会動向

1) 高度情報社会から感性社会へ

通信技術と情報処理技術の統合は、大量の情報を多様な方法で、しかも高速、高品質に収集、分析、加工、伝達することを可能にし、その成果は産業のみならず、家庭や個人の領域までに及んでおり、社会の高度な情報化が進んでいる。

その一方で、人々の中心的な関心は「もの」から「心」へと変化しており、これからの社会は、このような高度な情報化の対極的な欲求として、人間性や感性がより重視されることが予想されている。

2) 国際化

近年では、先進国との貿易摩擦や新興工業経済地域との国際分業、外国人労働者の増加など国際的な問題が提起されている。また、外国への渡航者や外国人の居住者が年々増加の一途をたどるなど、経済、産業、文化、生活、情報などあらゆる分野で「国境を意識しない」社会が到来することが予想されている。

3) 長寿社会

平均寿命の伸長により、日本は世界一の長寿国となった。一方、出生率の低下とあいまって、高齢化が急速に進行している。

高齢化の進行は、社会の活力の停滞、医療・福祉需要の増加、家庭環境の変化など大きな課題となっているが、単にこれらの課題克服にとどまらず、世代を超えて共に生きる社会、安心と生きがいをもって暮らせる長寿社会の実現が求められている。

4) 地球環境問題

人類の経済活動が地球環境を変化させるほど大きなものであることが、世界の人々の共通の認識になってきている。現在の資源・エネルギー浪費型社会は行き詰まり、オゾン層破壊や、二酸化炭素による地球温暖化などにみられるように、人類の生存条件そのものすら否定するようなことが予測されている。

5) 産業構造の変化

近年のエレクトロニクス、バイオテクノロジー、情報処理技術、新素材などハイテクノロジー産業は、急速に産業構造の変化をもたらしている。

一方、経済のサービス化、ソフト化の進展は、各種のサービス産業の成長をもたらし、従来の産業の垣根を超えた多様な業態を生み出すとともに第一次、第二次産業の分野においても、単なるものづくりから、いかに付加価値をつけ、それを情報システムの力により社会全般に周知していくかが産業の盛衰を左右するようになってきている。

6) 生活様式、価値観の変化

価値観の多様化、自由時間の増大、所得水準の向上などを背景に人々の関心は、物質的なものから精神的なものへと重心を移しつつある。

そのため、より高度で高品質な、本質的なものへの欲求が強まり、自然指向の高まりやスポーツ、レクリエーション、文化、芸術、ボランティアなどを日常生活に取り入れた様々な生活様式が現れてきている。

特に、21世紀は「芸術の世紀」「心の世紀」とも言われており、芸術・文化活動や生涯学習への指向は、情報化、国際化、サービス化の進展に伴い、一層の拍車がかけられることが予測される。さらに、このような高度の生活が実現できる都市を意識的に選択して、居住する時代が到来しようとしている。

(2) 将来像

第4次総合計画における将来像

芸術性豊かな創造・交流都市

－豊かな自然とともに－

本市は、第3次総合計画において「緑豊かな文化の香り高い活力ある産業都市」を目標にまちづくりを行ってきた。

今後とも、この精神を受け継ぎ、自然を愛し、文化の香り高い、いきいきとした産業のまちづくりを行っていくことが必要である。

しかし、21世紀における本市を取り巻く環境は、万国博覧会を契機として、広域幹線道路の整備や学術研究開発ゾーンの整備など国際的なレベルでの交流の場にふさわしい機能が整備されることが予想される。

本市にとって重要なことは、これらを契機として、次の時代における新たな都市イメージ（瀬戸らしさ）を築き上げていくことである。

特に、これからは、単にものを作るまちとしてのイメージを転換し、新たなデザインの創造など付加価値を高めた製品づくりや、生活における芸術文化の提案、芸術性豊かな都市の景観の形成などを通じ、新たな都市イメージを築き上げていくことが必要である。

こうした、付加価値の高い製品づくりや芸術性豊かな都市イメージづくりは、製品イメージを向上させ、ものを通じて芸術文化をアピールする方向へ転換することとなり、一方では新たな技術革新を促し、より創造的でいきいきとした産業を実現させる方向性を示すものである。

一方、芸術文化の面では、陶芸という本市固有の分野があるが、これまで伝統的で保守的なイメージが強かった。しかし、これらの芸術文化を発展的に継承していくためには、新たな分野にも挑戦していく必要がある。

今後は、これらの伝統的なイメージに加え、時代を先導するような、創造的で実験的な分野も組み入れていくことが必要となる。

第4次総合計画で掲げる、「芸術性豊かな創造・交流都市」には、以上のような「芸術性、創造、交流」の意味もあるが、今後はこれらを「まちづくりの指針」として考えていくことが必要である。

例えば、建物ひとつとっても、これまでのように機能性のみを重視するのではなく、周辺の景観など地域の持っている特性を考慮し、瀬戸らしい景観デザインの思想を持つことであり、道路一本にしても、車の通りやすさではなく、人間に視線を合わせ、社会的弱者へ配慮することやそれぞれに個性ある景観づくりをするなど、行政の担当するあらゆる仕事に対して、人間性、芸術性に配慮し、創造的な気持ちで取り組んでいくことである。

また、このことは、住民自身や企業が、景観や環境など自らのまちづくりへのかかわり方を示すことでもある。例えば、これまで蓄積してきた歴史や文化をまちづくりに表現することや、豊かな自然環境を積極的に創造していくことなどを通じ、自然豊かで潤いのある、あたかもまち全体が美術館となるようなまちづくりの方向も考えられる。

「芸術性豊かな創造・交流都市—豊かな自然とともに—」という将来像には、次のようなまちづくりに対する理念も込められている。

これまでの、効率性や機能性などの価値判断を優先したまちづくりに対する考え方から、人間性、感性、美しさ、自然、環境、潤い、思いやり、やさしさなど経済的尺度では評価しにくいものを価値判断の基準に含めた総合的なまちづくりへと転換することである。

このような効率・技術優先のまちづくりから芸術性、創造性といったものさしを付加したまちづくりへの転換は、本市の持つ特性を再評価することにつながり、芸術性豊かで潤いのある瀬戸らしい独自のまちづくり実現の道となる。

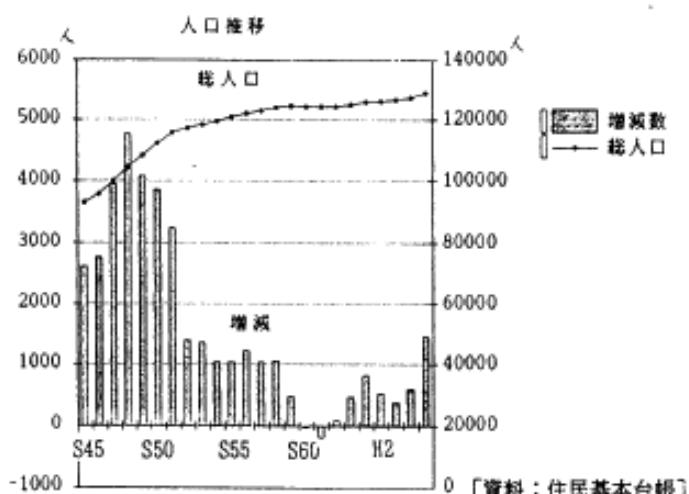
1-4 まちづくりの基本指標

(1) 人口フレームの基本的な考え方

本市の人口は、大規模な住宅開発が進んだ昭和40年代後半には大幅に増加したが、昭和50年代に入ると増加の幅が小さくなり、昭和60年代前半には一時減少する年もあった。しかし近年は、再度増加傾向を示している。

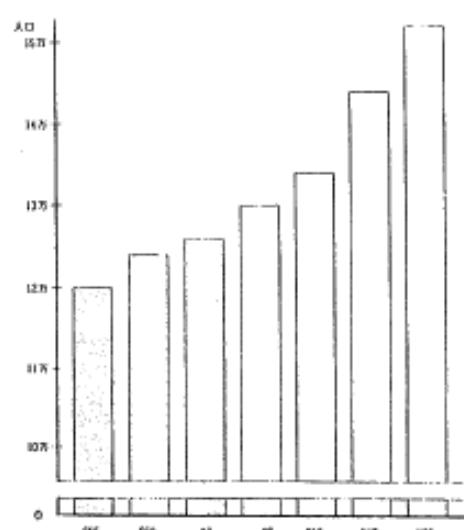
今後の人囗については、活力あるまちづくりを推進するため定住人口の増加を図ることとする。しかし、自然増加については、今後とも大幅な増加が見込めないため、政策的に社会増加を図るような施策を展開していくものとする。

そのため、新たな住宅市街地の整備や、研究機能、住機能などの複合機能を持った地域開発整備などの施策を積極的に進めていく。



	これまでの推移(国勢調査)			将来の見通し
	1980年 (S55年)	1985年 (S60年)	1990年 (H2年)	
総人口(人)	120,774	124,623	126,340	151,000
世帯数	35,003	36,804	38,962	57,200

[資料：国勢調査]



(2) 交流人口に配慮したまちづくり

都市に活力を与えるにぎわいを創出するためには、総人口（夜間人口）のみでは十分ではなく、今後は、本市に定住する人のみならず、市外からも数多くの人が訪れることが求められている。

数多くの人々が交流することは、産業の新展開を図る上でも、芸術・文化を振興する上でも、あるいは豊かな市民生活を築き上げていくためにも必要なことである。

従って、活力あるまちづくりを推進するために「交流人口」を定義づけることとし、交流人口を増加させることを、施策を検討する際の指針とする。

参考

定義

交流人口とは、昼間人口と非定住的な移動人口である観光客、買い物客等を総称して呼ぶこととする。

*昼間人口とは、

$$A\text{市の昼間人口} = A\text{市の常住人口} - \left\{ \begin{array}{l} (\text{A市に常住する15才以上就業者のうち從業先がA市外にある者}) + (\text{A市に常住する通学者のうち通学先がA市外にある者}) \end{array} \right\}$$

$$+ \left\{ \begin{array}{l} (\text{A市外に常住する15才以上就業者のうち從業先がA市内にある者}) + (\text{A市外に常住する通学者のうち通学先がA市にある者}) \end{array} \right\}$$

1-5 土地利用構想

土地は、市民生活、産業経済活動の共通の基盤であり、地域の発展、市民の生活に深いかかわりを持つ、限られた貴重な資源である。

21世紀へ向けてのまちづくりの基盤となる土地利用については、長期的な視野に立ち、将来への発展方向を見極め、地域の特性を生かして、総合的かつ計画的に行う必要がある。

◎広域的に見た位置

歴史的に見れば、瀬戸は尾張の“ふところ”という奥まった位置にある一方、三河や美濃と往来する所でもあった。

今後、南・東部の開発などにより、名古屋都市圏の拡大再編が進んでも、この基本的な構造は変化することはない。

将来は、名古屋東部丘陵一帯に広がる「あいち学術研究開発ゾーン」の中核を形成し、ゾーン内の諸都市との先端技術交流や学術交流が促進される。

同時に、交通網の発達は、東濃や三河などの地域とのつながりも強めることになり、伝統的な産業や山村文化との交流も容易になる。

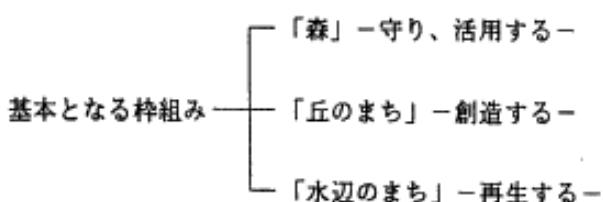
つまり今後も、大都市と山村、未来的な技術と歴史的な文化などの接点であり、広域的に見ても、これらが交流し、融合する最適な位置にある。

◎土地利用の枠組み

土地利用の枠組みは、本市の特色ある地形条件を尊重しつつ、これから開発動向を踏まえた都市の構造を明確にするものとする。

地形条件としては、大きく分けて、川を中心とした「水辺のまち」、それを囲む周辺部の「丘のまち」、さらにその外縁部の「森」である。

このような地形条件を生かし、基本となる枠組みを設定し、それぞれに土地利用の方向を示す。



① **森** …… 守り、活用する

・森の保全地区 …… 森に囲まれた都市の構造を守る。

・森の活用拠点地区 …… 森に親しみ、森を生かす場を整える。

② **丘のまち** …… 創造する

・住宅市街地地区 1 …… 快適な生活環境を整備する。

・住宅市街地地区 2 …… 生活環境と生産環境の調和を図りつつ整備する。

・工業団地整備地区 …… 多様な業種を擁する生産拠点として整備する。

・複合開発地区 1 …… 学術機能、芸術・文化機能、生産・研究開発機能、交流機能、住宅機能や自然環境が、相互に融合した複合ゾーンとして整備する。

・複合開発地区 2 …… 物流機能、生産機能、学術機能、保養機能などの複合開発地区として整備する。

・陶芸の里整備地区 …… 陶芸文化の振興と交流を推進するゾーンとして整備する。

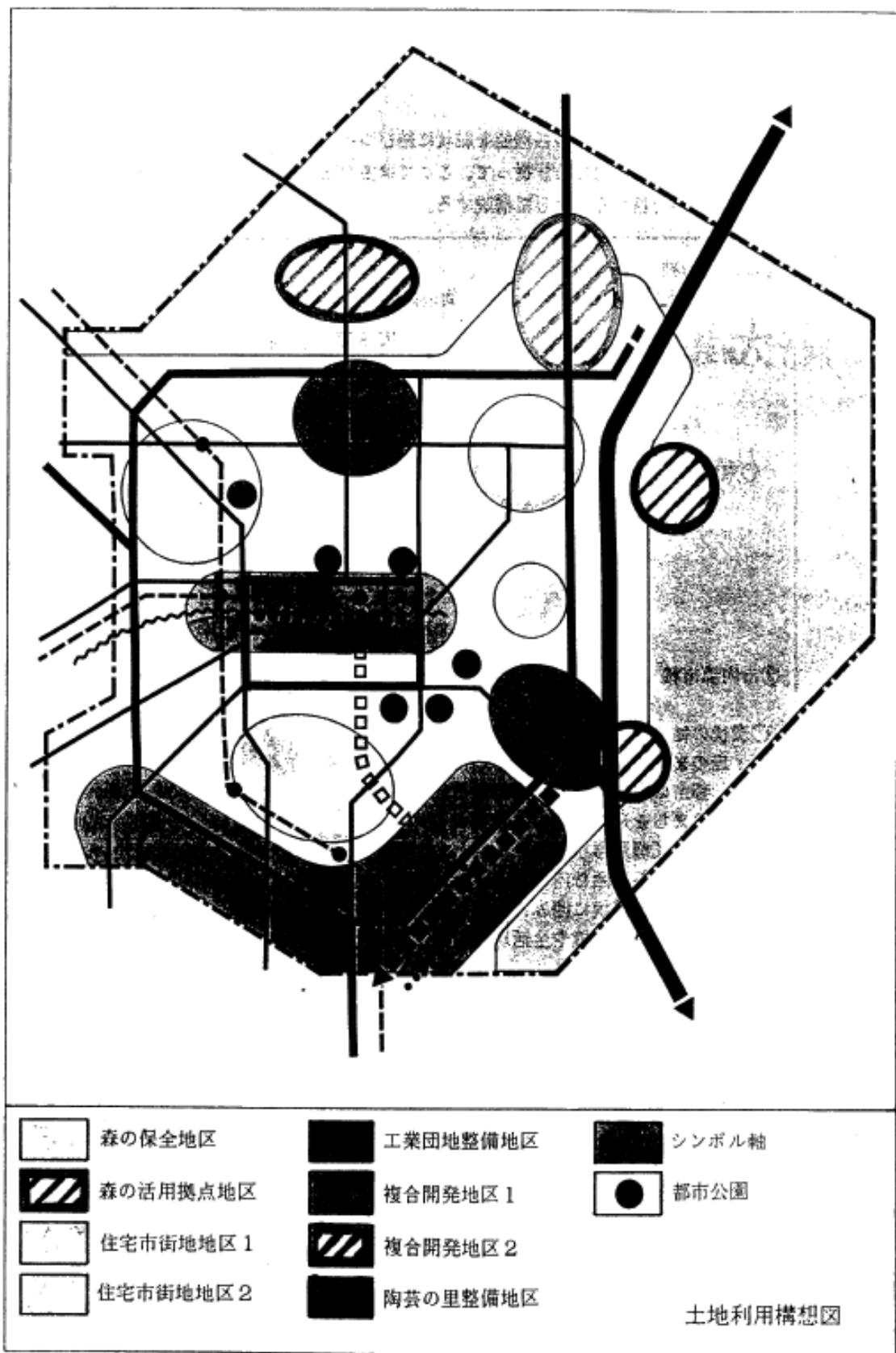
③ **水辺のまち** …… 再生する

中心市街地は、シンボルでもある瀬戸川を始め、丘や森の眺望、歴史的なまちなみ、静かなたたずまいなどを生かしたまちとして再生する。

また、次の2つの駅周辺には、それぞれの特色を生かした個的な整備を推進する。

・尾張瀬戸駅周辺 …… 歴史的なたたずまいを生かし、商業振興、観光振興、文化振興などにより、多様な機能が複合した、魅力ある空間整備を行い、にぎわいを回復する。

・新瀬戸駅周辺 …… 住宅市街地を結ぶ玄関口として、商業業務の集積を図り、生活拠点機能を高める。



○交通の骨格

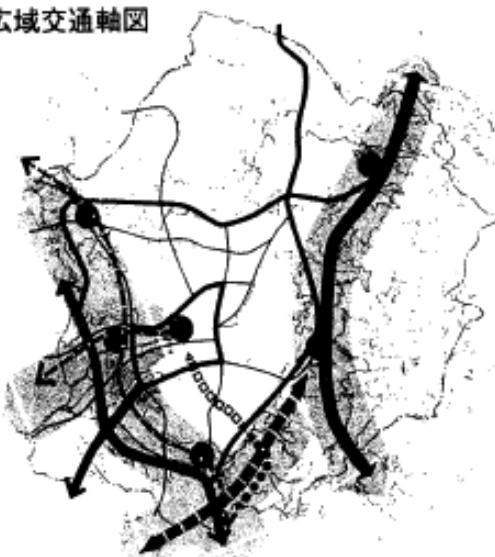
交通は、都市の各機能を軸状に結びつけ、土地利用構想と一体になって、都市の構造を組み立てる。従って、ここでは主要な交通体系を、次のような都市軸形成による骨格づくりとして構成する。

①広域交通軸

市の玄関口を位置づけ、市と周辺都市とを結ぶ主要交通網を形成する。

- 南北軸
 - ・東海環状自動車道
 - ・愛知環状鉄道（複線化）
 - ・新規鉄軌道線

広域交通軸図



②市内都市軸

○環状の軸

・丘のまちの外環状

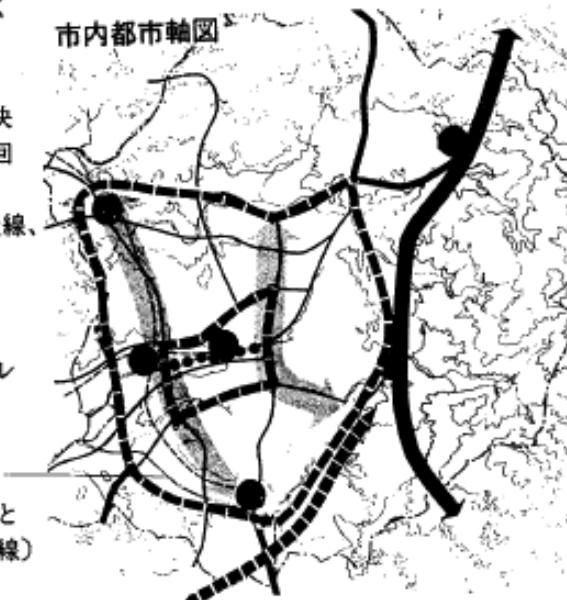
都市の主要な活動空間となる丘のまちを巡る交通の主軸をつくる。（瀬戸環状道路）

・水辺のまちを囲む内環状

中心部を環状に囲み、内部は快適な歩行者環境や生活環境を回復する。

（鹿乗共栄線、菱野線、陣屋線、穴田春雨線、瀬戸大府線）

市内都市軸図



○環内連携軸

・生活交流軸

住宅市街地、及び文化施設、レクリエーション施設を結ぶ。

（菱野線、鹿乗共栄線）

・歴史と産業軸

歴史的なまちと、産業拠点等とを結ぶ。（穴田春雨線、塩塚線）

○中心軸

・瀬戸川文化プロムナード

瀬戸川に沿って、歴史的なまちとにぎわいの核を結ぶ歩行者優先軸。

第2章 施策大綱

2-1 都市の骨格づくり

趣 旨 都市構造を確立するため、土地利用構想に示す整備方針を、計画的に具体化させていく。

特に、2005年（平成17年）に本市南・東部地区での開催が計画されている「21世紀万国博覧会（仮称）」を契機として、総合的な交通網の整備を進め、都市構造を再編し、これから本市を支える都市基盤の骨格を形成する。

また、森、丘、水辺という立地特性や恵まれた資源を生かすことにより、快適な都市環境を形成していく。

基本方針 ①計画的な土地利用を推進する

土地利用構想に基づく土地利用計画を定め、魅力ある都市整備を推進するとともに、開発と保全の調和のとれた秩序ある土地利用を図る。

特に、市街地については、計画的な整備に努め、居住環境と生産環境の調和を図りつつ、活力と潤いのある快適なまちづくりを進める。

②総合的な交通体系を整備する

都市の骨格となる道路網、鉄道網などの総合的な交通体系の再編・整備に取り組む。

また、幹線道路を軸として、バスルートなどの公共交通網の整備や物流機能の整備など、人との流れの秩序形成を目指す。さらに、快適な歩行者空間の整備にも取り組む。

③快適な都市環境を形成する

都市の快適性を創出するためには、本市の自然環境を生かすまちづくりが大切である。

市民が親しめる森の保全、市街地における公園の充実や緑化の推進、水辺の整備や水質の浄化などを、積極的に進める。

④美しい都市景観を形成する

本市は歴史のある都市であり、それらの歴史や文化を都市景観づくりに反映させていく必要がある。

特に市街地は、自然環境や歴史的資源と調和し、それぞれ個性的な表情を持つことが、都市の魅力を形成する大きな要素となる。

今後は、まちなみ景観の整備に取り組み、魅力ある都市づくりを進めていく。

|-2 いきいきとした産業都市づくり

趣 旨

本市の産業構造は、陶磁器産業に特化した段階から、多角化の段階に進みつつある。この方向は、既に工業団地の開発や企業誘致という形で具体化されているが、今後はこの流れを引き継ぎつつ、さらに次の展開を目指す。

ひとつには、企業や労働者にとって定着しやすい環境を整えることにより、多角的な産業をしっかりと根づかせることである。

さらに、陶磁器産業においては、陶磁器産業が長年にわたって培ってきた様々な価値に光をあて、多様な人々や情報の交流を背景に、産業面での新展開や文化・観光などへの展開を考えていくことである。

このようなステップにより、伝統を生かした新しい産業都市イメージの確立を図っていく。

基本方針 ①地場産業の新展開を図る

異業種との積極的な交流を推進するとともに、文化・観光との融合など新しい価値の創造発掘を行い、歴史を生かしつつ新展開を図る工夫や試みを支援する。

また、地場産業振興の基礎となる資源については、長期的な資源確保計画を策定し、安定供給に努める。

②商業の振興を図る

消費者のニーズや生活様式の変化を踏まえ、祭りや散策路整備など有形無形の地域資源と連動した整備をするなど、個性的で魅力ある商業の活性化を図る。

③観光の振興を図る

観光は、自然、歴史、芸術・文化など豊富な資源を生かし、やきものを素材としたまちづくりや陶磁器産業と観光との連携に着目するなど、個性的な観光地として整備する。

④工業の振興を図る

単なる企業誘致の段階から、企業の定着のための環境整備を進める。また、研究開発型企業の積極的な誘致を進め、これらと既存の業種との情報交換や交流促進を積極的に推進する支援体制づくりを行う。

⑤農林業の振興を図る

経営の近代化などにより、都市近郊農業としての基盤を確立する一方、都市との結びつきを強化し、観光レクリエーションなどとの融合を促進する。

また、造林計画により、適切な森林の維持保全に努める。

2-3 誰もが安心して住めるまちづくり

趣 旨 市民一人一人、あるいは家族が、安心して日々の生活を送ることは、まちづくりの基本である。そのために、次のような条件を満たすことが必要となる。

第一に、安心して住み続けるために必要な生活の基礎的な環境が整っており、かつ災害や犯罪などからの安全が保たれていることが必要となる。

第二に、健康な暮らしを維持する体制があることに加え、予期せぬハンディを負った場合に、適切な社会的支援体制が整っていることが大切である。

基本方針 ①安心して住み続けるための生活の基礎的環境を整える

生活に不可欠な上下水道や住宅、火葬場・墓地の整備、ごみ・し尿処理などの衛生的な収集・処理などを積極的に進め、安心して住み続けるための基礎的環境を整える。

②安全な生活環境を確保する

市民が安心して生活できるよう、災害や犯罪、交通事故、公害などを未然に防ぐことはもちろん、火災や風水害などの発生時に迅速な対処ができる消防防災体制を整える。

③健康な生活への備えをつくる

明るい市民生活は、市民一人一人が健康であることが基本になる。病気に備えて医療態勢を整えることに加え、病気にからないための健康づくりを重視し、健康都市づくりを進める。

④生活不安への社会的な支えをつくる

老後や、予期せぬハンディキャップを負った場合に、公的な生活支援や自立への手助けが必要になる。いざという場合に市民が支え合う社会づくりを目指す。

2-4 暮らしやすい地域社会づくり

趣 旨

個人や家族は、地域社会と深くかかわっている。このことを、一人一人が認識し、市民自らがその主体となって地域社会へ参加するしくみにすることが、暮らしやすい地域社会づくりの前提となる。

そのためには、市民一人一人が自己を高め、地域社会に関心を向け、地域づくりの主体となるための支援体制を整えるとともに、地域の自主性を尊重していくことが必要である。

基本方針 ①生涯を通じた学習を推進する

地域社会においていきいきと生活できるように、自己向上の欲求に応じた学習メニューを、生涯の様々な段階に応じて提供していく。

②地域における人づくりの機会と場を整える

青少年の健全育成や女性の社会参加など、世代や性別に応じた参加の機会を積極的に提供し、個々の人格形成はもとより地域社会において、市民が主体的な役割を発揮できるように努める。

③助け合いと自己管理の地域社会をつくる

失われつつある相互扶助の精神を再評価し、現代社会に適合するように再構築するとともに、地域福祉や健全な消費生活、身の回りの生活環境などの諸問題に、市民が積極的にかかわるような体制づくりをするなど、地域における相互扶助の精神と社会貢献の意識を醸成していく。

④地域のまちづくり活動を支援する

住民が自ら考え、自ら行動することが住民自治の基本である。このため、日常のコミュニティ活動を通じた自治意識の形成、さらには、主体的なまちづくり活動に対し、積極的に支援を行う。

2-5 森、丘、水辺の魅力あるまちづくり

趣 旨 本市の特徴ある環境条件であり、土地利用の骨格でもある森、丘、水辺の要素を生かし、それぞれに瀬戸らしい魅力ある拠点づくりを進める。
また、各拠点地域を結ぶネットワークを形成し、都市全体での創造と交流の活性化を図る。

基本方針 ①豊かな森を活用する魅力ある拠点をつくる

本市の豊かな森は市民共有の財産であり、これを守るために適切な保全を図るだけでなく、市民に親しみやすい森林空間としての整備を図る。
特に、定光寺地区、岩屋堂地区、赤津地区では、“森を育て、森に親しむ生活と憩いの場”として、誰もが積極的に森と触れ合える拠点整備を進める。

②丘の上に魅力ある拠点をつくる

本市の丘陵部は、北部地域を中心に住宅団地、工業団地などが形成され、本市の新しい活力の拠点となってきた。
これらの整備に引き続き、南・東部丘陵において計画されている地域整備を積極的に推進し、住機能やレクリエーション機能、学術・研究機能など様々な都市機能が融合した、魅力ある拠点づくりを目指す。

③水辺を生かした魅力あるまちをつくる

本市は、豊かな森が育んだ水が多様な水系となって丘を流れ、この水系に沿って居住地、生産地が歴史的に形成されてきた。
これらの自然的、歴史的な環境を生かしながら、瀬戸川、水野川、矢田川など、それぞれの水系に応じた魅力ある水辺空間を整備する。
特に、瀬戸川沿いについては、中心市街地のまちづくりと一体となった整備を促進する。

④森、丘、水辺の拠点を結ぶネットワークをつくる

森、丘、水辺の拠点を多様な交通・情報のチャネルで結び、人と文化と情報が出会い、交流し、融合できるネットワークを形成する。
このネットワークを通して行われる様々な活動により、新しい技術や芸術・文化を創造する母体を形成する。

2-6 歴史の感じられる国際的な芸術・文化都市づくり

趣旨 本市が千年余に渡って築き上げてきた歴史や文化を、次の世代に引き継ぎ、より心豊かな社会にしていくためには、さらに創造的な芸術文化施策を展開することが必要である。

また、まち全体において、この施策を積極的に展開していくためには、産業や観光、市民生活、国際化施策など、相互に融合させていくことが重要である。

基本方針 ①まちづくりに個性を表現する

まちづくりの素材として、やきものを積極的に利用していくことは、これまでに蓄積した歴史、文化を生かすためには必要不可欠なことである。

また、やきものづくりをしてきたまちの中には、既に多くのやきものに関する資源があり、これらを活用し、やきもののまちとしての景観や歴史を積極的に表現していく。

②世界との交流を促進する

これまでに蓄積した陶芸文化に、様々な面から光をあて、国際的な芸術文化振興施策を積極的に展開する。

そのため、広く国内外から様々な人を招き、国際的な交流や人材育成を図っていく。

③芸術性豊かな生活の提案

生活に深いかかわりのあるやきものや、やきもののまちとして歴史的に蓄積してきたものを市民生活の中に溶け込ませることにより、心豊かな市民生活の実現を図っていく。

そのため、気軽に陶芸文化に触れられるしきけづくりや雰囲気づくりを行っていく。

第3章 基本構想の実現に向けて

(1) 効率的な行政執行体制の確立 一柔軟で幅広い守備範囲を一

- ・市民が進むべき方向を明確にし、まちづくりの全体像を分かりやすくするとともに、その執行体制は簡潔なものとする。
- ・複雑化するまちづくりの課題に対し、相互に連携を密にする。
- ・基本となる事業配置に加え、重点事業やテーマ性を持ったプロジェクトなど、実行性のある事業を展開する。

(2) 合理的な財政運営 一健全な経営体質の確立を一

- ・長期的な都市経営の観点から事業を見直すことや、収益事業の導入を検討するなど、経営体質の強化を図る。
- ・行政投資効果を向上させるための事業の計画性、関連事業の相互調整などを心がけるなど、職員一人一人が経営的努力を行うように努める。

(3) 市民主体のまちづくりへ一フットワークを良く一

- ・まちづくりの主体は、あくまで市民にあるという基本的な認識に立つ。
- ・その上で、地域の住民と行政が協同でよりよいまちづくりを目指して計画づくりを行う。